

騒音事件記録 NO. 3

近隣騒音トラブル

母子殺傷事件

(平成5年10月発生、

平成7年2月判決)

1. 事案の特徴、概要

△特徴▽

①隣家の子どもたちの声やテレビの音などがうるさいと母親を刺殺、子ども二人にも重傷を負わせた事件。

②騒音トラブルの諍いの中で当事者の発した言葉が、事件発生に大きく関わった事例。

△概要▽

小さな戸建ての借家が密接して並ぶ住宅地において、夫婦と子ども2人の4人家族で暮らす家庭からの、子どもたちの声や生活騒音がうるさいと怒った男性が、相手方の住宅に押し入り、母親と子ども2人を包丁で

刺し、母親を殺害、子どもにも重傷を負わせた事件である。犯人は、殺人および殺人未遂で懲役16年に処せられた。

犯人は借家に一人暮らしであったが、日頃から被害者家族からの生活騒音を原因として諍いが絶えなかった。ある時、犯人と被害者である母親が激しく口論することがあり、その時に母親が発した「お前なんか精神病院にいけ！」と言う言葉に激怒した犯人が、それから10日後に事件を起こした。日常の近隣騒音を原因とし、犯人の爆発的人格障害と口論、飲酒が引き金となって発生した悲惨な事件であり、騒音事件発生の4条件を備えた典型的な事例であり、事件発生防止の参考例となるものと考え取り上げた。

なお本件も、判決書きのみの閲覧資料によるものであり、調書等の閲覧は許されなかった。

が多発する時代を迎え、社会の騒音問題への意識の変化を感じさせる事件ともいえる。

同種の事件としては、昭和49年に発生した有名なピアノ殺人事件があり、当時、新聞等で大々的に取り上げられた。その後20年が経って発生したこの事件は地方紙で報じられただけで、特段、大きな話題とはならなかった。騒音トラブルや騒音事件

2. 事件の詳細経緯

事件の現場

事件現場となったのは、東京近郊の地方都市に位置する古くからの住宅密集地である。最近、駅から郊外に向かうモノレールができ、始発の駅から2駅ばかりという交通の便の良さもあり、少し寂れた町並みにも拘わらず転入してくる人が増えていた。事件の被害者となった川村聡子（仮名、26歳（事件当時、他も同じ）、主婦）の家族も、同じ市内のアパートから、現場となったこの1戸建住宅へ引っ越してきた。事件発生の1年ほど前のことである。

モノレールの駅を降り、幹線道路から横に伸びた道路を500mほど進み、更に細い路地を入った所に、同じ1戸建ての賃貸住宅が10軒並んでいた。縦に4戸、それと直角方向に3軒ずつ2列に並んでおり、その3軒の手前の端の住宅が聡子の家であった。建物はかなり古くて粗末なもの、小さいながらも自前の庭がついており、住宅以外には大きな建物もない静かな環境であった。

この賃貸住宅は、借家ゆえか、殆どご近所同士の交流はなく、町内会にも加入する

ことはなかったため、周辺の住宅との付き合いも殆どなかったという。ただし、子供同士は何の抵抗もなく、相互に家に出入りして遊んでいた。

加害者と被害者

加害者となった太田哲也（仮名、38歳、無職）は平成3年の9月に単身でこの借家に入居した。奥側にある3軒並びの真ん中の住宅である。

被害者の聡子の家族は、その約1年後の平成4年にこの住宅に入居してきた。加害者の太田の家とは筋向かいになり、丁度、聡子の家の庭の前を通って太田が玄関に向かう形となる。聡子の夫・正則（仮名、31才）は新聞外交員であり、4歳になる長男の正紀（仮名）、2歳になる長女直美（仮名）の4人家族であり、家の中はいつも子供達の騒ぎ声に溢れていた。それに合せ、正則と同じ年頃の裏の戸建て住宅の子供たちが遊びにくることが多くなったため、その賑やかさは時にはうるささいぐらいであった。

ある日の午後、住宅中に響くような激しい口論の声が聞こえてきた。聡子の家の夫

夫婦喧嘩の声であった。併せて、夫婦喧嘩に触発されたのか、今度は子供が大声で泣き始めた。その騒音は、密接して並ぶ借家の壁に反響して、太田の家の中にも響いていた。

「なんてうるさい一家なんだ。とんだ奴等が入ってきたもんだ」

太田は焼酎をひとり飲みながら、ぶつぶつと文句を言った。喧嘩の騒音はそのうち収まったが、夕方になると、今度は母親が子供を大声で怒りまくる声が響いてきた。その怒鳴る声は、子供の泣き声を押さえ込もうとするように段々ヒステリックになり、子供の泣き声はそれに輪をかけ、断末魔の悲鳴にも似た叫び声になっていた。

だいぶ焼酎が回っていた太田の耳には、この騒音は恐ろしく神経に障った。特に、子供の甲高い泣き声は、頭の中を針で突付かれていくようなズキズキとした痛みまでもたらした。昼の騒音で十分に鬱積していた怒りが、この子供の泣き声で一気に爆発した。太田は、聡子の家に面するガラスの引き戸を開けて、大声で怒鳴った。

「こらあ、うるさい、静かにしろ！」

母親の声は止まったが、子供の泣き声はそのまま響き続けた。

夫婦喧嘩の声、子供を叱る声、火のついたような子供の泣き声、それに大きな音で鳴らすテレビの音など、聡子の家からの騒音はその後もうるさい。いや、これは本当に騒音と呼べる程の音だったのかどうかは定かではない。どこにでもある隣近所から漏れ聞こえてくる、単なる生活音だったのかも知れない。しかし、一旦怒りを憶えてしまった太田にとっては、これは神経を逆なでするに十分なぐらいの大騒音に聞こえたであろう。

その後も、川村家と太田との争いは続いた。太田は、事件の1ヶ月ほど前にも子ども声がうるさいと川村家に怒鳴り込み、聡子の夫・正則と怒鳴り合いになったことがあったと近所の人は証言した。

事件発生のきつかけ

事件発生の10日前、朝からのパチンコで大負けした太田は、腹立たしい思いで聡子の家の裏を通りかかった。聡子の家からは物音はしなかった。立ち止まった太田は、路地の端に並んでいた空きビン数本を手に取り、「この野郎、いつもうるさいんだよ」と怒鳴って、ビンを聡子の家の庭に投げつけた。ビンは庭の石にまともに当たり、大

きな音をたてて砕け散った、それと同時に、庭に面したガラス戸が物凄い勢いで開き、聡子が顔を出してどなった。

「何をすんだよ！」

誰も居ないと思っていた太田は一瞬面食らったが、相手に負けぬぐらいの大声で怒鳴り返した。

「いつもうるさいんだよ。静かにしろ！」

「どこがうるさいのよ。ガラス拾いなさいよ！」

怒鳴り合いが続いたあとの、最後に言った聡子の一言が、凄惨な事件の発生を決定づけるものとなった。

「お前なんか、精神病院に行け！」

聡子があびせるように大声で怒鳴りつけた。太田は、精神病院とは何という言い草だと謝るように詰め寄り、聡子もしぶしぶ謝罪の言葉を口にしたものの、太田はその謝り方が気に入らず、不服のまま部屋に戻った。

部屋に戻った太田は、怒りを抑えるように焼酎を飲み始めた。「何が精神病院だ、あの野郎」。しかし、怒りは収まるどころか、聡子の形相が目の前にちらつき、頭の中を聡子の声が駆け巡った。その後も、焼酎を飲むたび、寝ようと床に入るたびに、精神

病院に行けと怒鳴った聡子の顔が浮かび、頭から離れなくなった。

「畜生、人を馬鹿にしやがって！」

何度も何度も、怒りは繰り返して押し寄せた。いつしか、その怒りの言葉の後に、「ぶっ殺してやる」という一言が付け加わるようになっていた。

事件の発生

事件当日、太田は朝から洗濯をし、料理をしたり包丁を研いだりと、普段と何も変わらない一日のはずであった。しかし、昼過ぎに焼酎を飲み始めた頃から、太田と聡子の人生が大きく変化し始めていった。

夕方になると、太田は台所へ入り、いつも使っている刃渡り20・6cmの柳刃包丁と小ぶりの包丁の2本を両手に握り締め、そのまま筋向いの家へと向かっていった。頭の中には「精神病院に行け」と怒鳴った聡子の声が、残響過多の空間のように鳴り響いていた。

太田は聡子の家へ出向くと、庭に面した6畳間のガラス窓を包丁で叩き割り、そのまま部屋に上がりこんだ。部屋に居た聡子が驚いて立ち上がった所を、聡子めがけて飛び掛った。聡子は思わず避けようと腕を

挙げて顔を庇ったが、包丁はその手の下の胸に無残にも突き刺さり、聡子はあおむけに倒れた。男は、そのまま上から包丁を突き下ろして聡子の腹部や胸を何度も突き刺した。そばにいた近所の子どもは大声で泣き叫びながら逃げ出したが、正紀と直美はその場に立ち竦んでいた。興奮した太田は、正紀をつかまえて複数回突き刺し、逃げようとした直美にも背中を包丁で突き刺した。

逃げ帰った大家の子供の話から警察に事件が通報され、パトカーのサイレンや集まる野次馬で回りは騒然となった。聡子は、到着した救急車で病院に運ばれたものの、出血多量で1時間後には死亡した。長男の正紀は3ヶ月の重傷を負ったものの、なんとか一命は取り留めた。直美も重傷であった。聡子の刺し傷は胸部や腹部に13箇所、背中に5箇所、その他、顔面や頸部にも多くの刺し傷があり、いわゆるメッタ刺しであった。すさまじい恨みの存在を思わせた。

犯人の異様性

事件直後の太田の行動が、そのパーソナリティの異様性を象徴していた。太田は住宅地を徒歩で離れる途中、隣人と出会い、

「いま、これであのおつかあを殺してきた。もう死んでるよ」

と包丁を示した。一仕事終わった時のような、すこし自慢げな話し振りであった。その後、近くでトラックを盗み、しばらく走ったあと車を乗り捨て、近くの飲み屋に入った。

血だらけの服に驚く店主に、「やくざと喧嘩をしてきた」といい、再び焼酎を飲むと、カラオケでおはこの歌を2、3曲歌ったという。後の捜査員の聴取に対して、店主は、「歌詞もメロディもしっかりしていて、どこにもおかしい様子がなかった」と、とても人を殺してきた直後とは思えない様子だったと話している。何の動揺もなくカラオケを楽しむ殺人者、太田は、むしろ一種の達成感を感じていたのかも知れない。その後店を出ると、ぶらぶら歩いて自宅の方角へ向かった。返り血を浴びたまま近所をうろついているところを緊急配備の警察官に取り囲まれ、そのまま緊急逮捕された。

懲役16年の判決

裁判では、被告弁護側は、飲酒による心神喪失、心神耗弱を主張して情状酌量を求

めた。精神鑑定の結果では、知覚異常、幻覚幻聴もないが、視線恐怖を主症状とする対人恐怖症を有すと判定された。ただし、その症状は統合失調症に至るようなものではなく、軽度の神経症であるとされた。その結果、小さな音や話し声が耳について離れず、イライラするという状況が生じ、犯行当日は、中程度の単純酩酊により抑止力が低下し、爆発的人格障害もあり、事件を引き起こしたと判示した。結局、心神喪失などは認められず、聡子のみならず子供にまで切りかかっていること、普段から他人に「あれを刺してやるけど殺さない」などと公言していたことなどが決め手となつて、殺人および殺人未遂で懲役16年の刑が言い渡された。太田は控訴することなく、2週間後には刑は自然確定した

3. トラブル防止・解決のための事案分析および解説

3.1 ピアノ殺人事件との類似点と相違点

この事件は平成5年10月に発生しているが、その19年前の昭和49年には、有名なピアノ殺人事件が発生している。ピアノ殺人事件は我が国で初めての騒音事件であり、当時の社会に大きな衝撃を与え、騒音に対する市民の意識を一変させた。それ以後、騒音による殺傷事件が頻発する時代を迎え、その中の一つとして当事件も位置づけられる。

ピアノ殺人事件は、その名の通り集合住宅の下階からのピアノ騒音が原因で発生し、母子3人が殺された凶悪事件である。これに対し、当事件では子どもの声の原因の一つとなっており、集合住宅と1戸建住宅という違いはあるものの、どちらも近隣からの騒音を理由として発生した殺傷事件であるところから、一見、よく似た状況のように見える。しかし、2つの事件は核心的な点で大きく異なっており、それが事件の持つ衝撃度を分けていると考えられる。

ピアノ殺人事件は、毎日のように響いてくるピアノの音が犯人の心理状態を追い詰め、事件に繋がって行っており、加害者と被害者家族との直接的な言い争いや暴力沙汰は生じていない。純粹に騒音の存在が引き起こした結果であり、騒音はそこまで人を苦しめる存在であると言うことを社会に示した事件である。実際には、加害者のパラノイアという病質も事件の発生に大きく関わっているのであるが、これは社会には殆ど広報されなかったため、騒音の影響だけが大きく取り上げられた。

片や、当事件は日頃からの騒音も理由の一つではあったが、直

接的には事件の10日前に発生した当事者同士の激しい口論が大きな原因となっている。騒音は、日頃の争いの原因となっていたが、事件の直接の原因ではない。加害者の爆発性人格障害というパーソナリティ特性をベースとして、口論で芽生えた相手への攻撃性が心の中で次第に醸成され、それが制御できないまでに膨れ上がって事件発生へと繋がっていった。その攻撃性の醸成を強くもたらしたものが、口論の時の相手の言葉と表情だったのであろう。この事例も、騒音事件の発生4条件を全て備えている状況であり、典型的な騒音事件の一つであるといえる。騒音事件の防止を考える上で重要な事例であるといえる。

3.2 騒音事件件数の推移

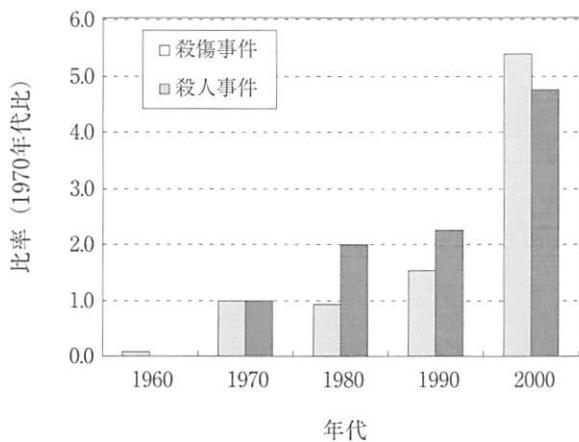


図3-1 騒音事件件数の年代別推移

ピアノ殺人事件を契機として、騒音に係わる事件は増加傾向を続けている。図3-1は、ピアノ殺人事件のあった1970年代を基準として、10年毎の騒音関連の殺人事件、および殺傷事件（殺人事件＋傷害事件）の事件数をグラフ化したものであるが、時代とともにその件数は増加傾向を示している。この推移傾向が

今後とも続くと仮定すると大きな社会問題に発展することとなるが、現在は既にあちこちでその傾向が現れてきている。社会がこれに対処するためのシステムを構築し、この増加に歯止めをかけることが急務であると云えるであろう。